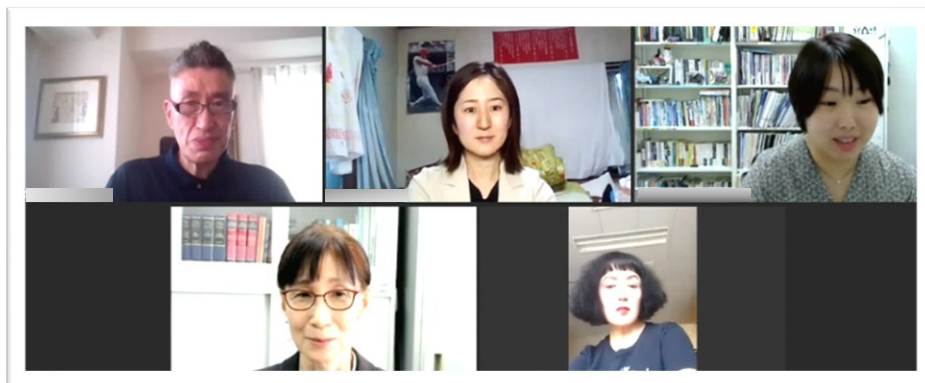


セミナー1「シェイクスピアとファン・カルチャー」

本セミナーは10月10日13:00より、オンラインで行われた。コーディネーターは中野春夫、吉原ゆかり、メンバーは石塚倫子、吉田季実子、松田幸子である。発表概要は以下の通り（発表者順）。



中野春夫（学習院大学）

「シェイクスピア・ファンの誕生」

なぜ今日、シェイクスピアにだけ知名度と人気が集中し、ベン・ジョンソンやポーモント&フレッチャー、マーロウはグローバルな文化的アイコンになり損ねたのか？本発表は、18世紀前半期において、ファン・カルチャーの形成というシェイクスピア受容だけに生じていた現象に注目し、これまで指摘も、注目もされてこなかったように思われるシェイクスピア崇拜(bardolatry)の核心的な現象を明らかにした。

トンソン出版社がニコラス・ロウ編集版シェイクスピア全集を刊行した1710年前後から、シェイクスピア・ビジネス（全集版などの出版物、オリジナル版シェイクスピア劇の上演、改作劇など二次創作物、真贋を判定する「研究者」、「聖地」観光ツアー、イベント企画、同好会結成、貴族や女性がサポーター）が加速度的に発達していく。本発表では、これが他の劇作家や詩人には見られないシェイクスピア受容特有の現象であることを検証した。

松田幸子（高崎健康福祉大学）

「シェイクスピアの庭：私と彼のオーガニックな絆」

シェイクスピア・ガーデン（Shakespeare Garden）と名付けられた庭は、北米を中心に世界各地に点在している。これらの庭にはシェイクスピアのテキストに登場する植物が植えられ、その引用が掲げられる。また、ゆかりの草木の移植や、関連する建築物の復元、チュ

ーダー朝の庭の再現が行われることもある。本発表では、シェイクスピアと自然とを結びつけ、〈イギリスらしい〉ランドスケープの中にシェイクスピアの存在を見出そうとする営為が、18世紀中頃のシェイクスピア崇拜に伴うストラトフォード・アポン・エイヴォンの観光地化とともに生じたことを概観した。加えて、そのような聖地巡礼の動きの中で、とりわけ女性ファンがシェイクスピアの草花を愛好し、草花を媒介としてシェイクスピアとオーガニックにつながろうとしていたことを、自らシェイクスピア・ガーデンを造園したアメリカ人の英語教師、ミセス・シェイの例を見ることで明らかにした。

石塚倫子（東京家政大学）

「日本のミステリにおける『ハムレット』ファン・カルチャー」

日本のミステリ小説において、シェイクスピア、特に『ハムレット』人気は堅調である。古くは1935（昭和10）年の小栗虫太郎『オフェリヤ殺し』に始まり、戦後は特に1970年代以降のミステリ・ブーム以降、『ハムレット』を土台としたミステリ小説が次々と誕生する。背景にはミステリの大衆化に加え、日本におけるシェイクスピア受容の拡大と浸透がある。さらに『ハムレット』という作品自体の豊富なミステリ性も人気の要因である。

ここでは、久生十蘭『ハムレット』（1946年）と野阿梓『兇天使』（1986年）を例に挙げ、『ハムレット』ファン・カルチャーの様相を探った。また、このジャンルにおける女性表象の意味を探りつつ、セミナー全体のテーマ「女性」について考察した。最後にミステリで原作を自由にカスタマイズしている点は、シェイクスピアを格下げしているのか、あるいはファン・カルチャー形成の過程でさらなる解釈の可能性を開拓しているのかを論じた。

吉田季実子（法政大学非常勤講師）

「1970年代少女漫画文化におけるシェイクスピア受容」

本発表では、1970年代の少女漫画におけるシェイクスピア戯曲の引用と翻案を扱った。今日では日本のサブカルチャー、あるいは文学としての地位を得ている少女漫画であるが、作り手と受容層の相互の関係性、すなわちファン・カルチャーが確立したのは1970年代にさかのぼる。女性が少女漫画作者としての立場を構築していく中で表出したのがセクシャリティーの問題や身体への違和感であり、シェイクスピア戯曲における異性装の物語を引用、翻案することで（美）少年を主人公とする復讐劇を創作することができる。作家たちは幼少時からシェイクスピアのリライト版を含む欧米の文学に馴染みがあり、西洋を舞台とする作品を作ることは彼女らもまた一種のファンであったことを意味する。当発表で扱った作品はいずれも劇中劇としてシェイクスピア戯曲を引用した復讐譚であり、ハムレットの構造の翻案であるといえる。同時にただの引用にとどまらず、元戯曲の解釈を提示している側面もあり、シェイクスピア戯曲の可塑性が発揮されているのではないだろうか。

吉原ゆかり

「アニメ・コスプレのシェイクスピア」

近年学術研究で、シェイクスピア作品の価値は、ファンやユーザーたちに二次創作的意味の置き換えを許すところにあるとして、ファン（ユーザー）たちに、より積極的な役割を認める傾向が強まっている。シェイクスピアを権威溢れるオリジナル、解説・翻案・改作の方を劣化したコピーとする考え方、シェイクスピア崇拜(Bardolatry)的な考え方があるが、それに対し、ユーザーたちがシェイクスピア作品を自分たちがそこから著作権フリーで素材を取ってくる材料箱であるかのように振る舞う現象は、シェイクスピア偶像破壊 (Bardoclast) 的なものとも見える。アニメやコスプレ、二次創作においてファンたちがオフィーリアを、オリジナルの美しいが無力なオフィーリアとは対極的な存在に反転・変容させているさまを分析し、ここにシェイクスピアに「死後の生」をあたえる、シェイクスピア崇拜・偶像破壊が一体化を見る。